

平成22年度農作物有害動植物発生予察情報 発生予報第5号(8月)

平成22年7月29日
山形県病害虫防除所

[概要]

普通作物：出穂期前後は穂いもちの重要な防除時期にあたるので、穂孕後期および穂揃期の2回の防除を徹底してください。なお、いねの出穂が早まっているので、防除時期を失しないよう注意してください。

フタオビコヤガの発生量は多い予想です。薬剤防除を行う場合は、若齢幼虫期に実施してください。

園芸作物：りんごの斑点落葉病、黒星病の発生量は多い予想です。降雨が続く場合は、散布間隔があきすぎないように雨の合間をみて防除を行ってください。果樹カメムシ類は、今後新成虫が発生する時期であり、園地内に飛来するおそれがあるため早期発見に努めてください。

次回の発表は8月25日の予定です。

予報内容一覧

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
いね	穂いもち	やや早い	平年並
	紋枯病	-	やや少ない
	斑点米カメムシ類	-	平年並
	フタオビコヤガ(イネアオムシ)	-	多い
だいず	マメシンクイガ	-	平年並
	ジャガイモヒゲナガアブラムシ	-	平年並
りんご	斑点落葉病	-	多い
	黒星病	-	多い
もも 日本なし 果樹共通害虫	灰星病	-	平年並
	黒星病	-	やや多い
	果樹カメムシ類(り・も・な・か)	-	平年並
	ハダニ類(り・も・な・お)	-	平年並
夏秋きゅうり 野菜・花き共通害虫	褐斑病	-	平年並
	アブラムシ類(夏・は・き)	-	やや多い
	ハダニ類(夏・き)	-	やや多い

下記の病害虫は、防除上注意すべき事項などについて記載しています。

作物名	病害虫名
いね	セジロウンカ、コブノメイガ
	紫斑病、ハスモンヨトウ、ウコンノメイガ
だいず	炭そ病
	モモハモグリガ
りんご	晩腐病、灰色かび病、べと病、褐斑病、さび病
	輪紋病
もも	シンクイムシ類(り・も・な)、ウメシロカイガラムシ(も・お)
	リンゴコカクモンハマキ(り・な)
ぶどう	べと病、斑点細菌病、うどんこ病
	炭そ病
西洋なし 果樹共通害虫	アザミウマ類
夏秋きゅうり すいか	

()内 り：りんご、も：もも、な：なし(西洋なし、日本なし) お：おうとう、か：かき、
夏：夏秋きゅうり、は：秋冬はくさい、き：きく

山形県病害虫防除所 本所 TEL 023-644-4241 FAX 023-644-4746 庄内支所 TEL 0235-78-3115 FAX 0235-64-2382	ホームページ(URL) http://www.jppn.ne.jp/yamagata/
---	--

山形県農薬危害防止運動実施中

実施期間 平成22年6月21日～8月20日

山形県では関係機関と連携して、農薬が最も使用される時期を重点に、農薬による事故防止と、より一層の農薬適正使用に向けて農薬危害防止運動を行っています。農薬の使用にあたっては、以下の点に注意しましょう。

1. 農薬の購入と保管管理にあたって

農薬は農林水産省登録番号のあるものを、必要量だけ計画的に購入しましょう。購入時は有効年月を確認し、期限内に使用しましょう。農薬は盗難防止等のため、鍵のかかる専用保管庫で保管しましょう。不要になった農薬を処分する場合は、農協や農薬販売店等にご相談ください。また、農薬の空容器、空袋等は、廃棄物処理業者に処理を委託しましょう。

2. 農薬の使用にあたって

ラベルに記載されている 適用作物、 使用量（希釈倍数）、 有効成分ごとの総使用回数、 使用時期（収穫前使用日数）等をよく読んで、記載事項を正しく守って使用しましょう。

農薬散布にあたっては、事前に周辺の生産者、養蜂業者、住民等に防除計画をお知らせするとともに、周辺ほ場の農作物や住宅地、公共施設、家畜、河川等への飛散・流出を防止するため、次の点に十分に注意しましょう。

- ア 風の強いときを避け、風向に気をつけて散布しましょう。
- イ 散布量が多くなりすぎないように気をつけましょう。
- ウ 散布の方向や位置に気をつけて散布しましょう。
- エ 飛散しやすい細かい散布粒子のノズルは使わないようにし、散布圧力は必要以上に上げすぎないようにしましょう。

散布者自身の事故防止のため、マスク、防除衣、手袋等を必ず着用するとともに、気温の高いときや、体調が悪いときは散布をしないようにしましょう。

3. 農薬散布後は

タンクやホースは洗いもれがないようきれいに洗い、また洗浄液が排水路や河川等に流出しないようにしましょう。

農薬の使用月日、農薬名、対象作物名、使用量（希釈倍数）等を記録し、保管するようにしましょう。

4. 万が一の事故の場合

農薬の誤使用等で健康被害が発生した場合には、応急処置を行い、すみやかに最寄りの医療機関で処置してもらいましょう。

農薬の相談は：	エコ農業推進課(023-630-2434)
	病虫害防除所(023-644-4241) 庄内支所(0235-78-3115)
農薬情報は：	最寄りの各総合支庁各農業技術普及課
	やまがたアグリネット(愛称：あぐりん) http://agrin.jp/
毒物・劇物の相談は：	最寄りの各保健所
	・村山保健所(023-627-1248) ・最上保健所(0233-29-1257)
	・置賜保健所(0238-22-3872) ・庄内保健所(0235-66-4738)
	保健薬務課(023-630-2333)

1. 合成ピレスロイド剤等を使用する場合は、市町村農作物有害動植物防除協議会等で定めた地区に限って使用し、蚕・魚類に対する被害を防止する。
2. 耐性菌・抵抗性害虫の出現を防止するため、薬剤の選択及び使用回数に留意する。
3. 農薬の使用後は防除日誌の記帳に努める。

予報根拠中の記号 (+): 発生量を多くする要因 (-): 発生量を少なくする要因

普通作物

1. いね

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
(1) 穂いもち	やや早い	平年並

1) 予報の根拠

- ア. いねの出穂期は、3日程度早いと予想されている。
- イ. 7月27日現在、葉いもちの発生は平年並である。
- ウ. 7月後半の巡回調査では、上位葉での発生は少なかった。
- エ. 8月の天候は、気温が高く、降水量は多く、日照時間は少ない可能性が大きいと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 穂孕後期と穂揃期の2回、必ず防除を実施する。
- イ. ほ場をよく観察し、葉いもちの病斑が上位葉にみられる場合には、穂揃期散布の7日後にも防除を実施する。
- ウ. 航空防除や無人ヘリコプター等による共同防除を計画しているところでも、上位葉に葉いもちが発生しているほ場では、共同防除に加え個人防除を実施する。
- エ. 降雨が続くような場合は、雨の合間をみて防除する。
- オ. 薬剤耐性菌出現防止のため、同一成分の薬剤の連用は避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 紋枯病	やや少ない

1) 予報の根拠

- ア. 7月27日現在の発生量はやや少ない。(-)
- イ. 7月20日現在、いねの茎数は少ない。(-)
- ウ. 8月の天候は、気温が高く、降水量は多い可能性が大きいと予報されている。
(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 出穂期での防除要否の目安は下表のとおりである。
- イ. 薬剤散布量が少ないと効果が劣るので、散布量を厳守し、株元によく付着するよう散布する。

表 防除要否の目安 (調査場所: 水田中央部) 品種: はえぬき

判定時期	防除の判断基準
出 穂 期	発病株率 15%以上で防除

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 斑点米カメムシ類 (アカヒゲホソミドリカスミカメ ・オトゲシホソカメムシ ・アカシカスミカメ)	平年並

1) 予報の根拠

- ア．7月後半の巡回調査の結果、畦畔・農道における斑点米カメムシ類の平均すくい取り虫数は7.3頭(平年:5.8頭)とやや多く、発生確認地点率は50.0%(平年:61.8%)と平年並であった。ただし、置賜および庄内地域で生息密度の高いところがみられる。
- イ．水田内におけるアカヒゲホソミドリカスミカメの平均すくい取り虫数は0.5頭(平年:0.5頭)と平年並、発生確認地点率は8.0%(平年:19.2%)とやや低い。
- ウ．7月5半旬までの予察灯におけるアカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺数は、山形市、寒河江市ではやや少なく、鶴岡市藤島では少ない。

2) 防除上注意すべき事項

- ア．穂揃期および穂揃期7～10日後の2回、薬剤防除を必ず実施する。なお、薬剤はカメムシ類の生息している畦畔にも十分かかるように散布する。
- イ．穂揃期7～10日後の防除終了後も水田内のすくい取り調査を行い、飛来・生息が確認された場合や、割れ初めの発生が懸念される場合は、さらにその7～10日後に防除を実施する。
- ウ．8月に入ってから草刈りはカメムシ類の水田侵入を促すため、草刈り後速やかに薬剤防除を行うか、水田の薬剤散布計画に合わせて行う。
- エ．カメムシ類の生息場所となっている休耕田では、耕うん等による除草を徹底する。また、薬剤で防除を行う場合は、水田の薬剤散布時期に合わせて休耕田に適用のある薬剤を使用する。
- オ．アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカシカスミカメは移動性が高いことから、広域で一斉に防除を行うと効果が高まるので地域ぐるみで実施する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(4) フタオビコヤガ (イネアオムシ)	多 い

1) 予報の根拠

- ア．7月後半の巡回調査の結果、発生量は多い。(+))
- イ．7月5半旬までの予察灯における誘殺数は、山形市、鶴岡市藤島とも多い。(+))
- ウ．8月の天候は、降水量が多く、日照時間は少ない可能性が大きいと予報されている。(+))

2) 防除上注意すべき事項

薬剤散布は、若齢幼虫期(葉先がカスリ状になった時)に行う。

(5) セジロウンカ

7月後半の巡回調査におけるすくい取り虫数は平年並である。台風や低気圧の通過などで多飛来することがあるので、今後の発生動向に注意する。

(6) コブノメイガ

7月後半の巡回調査の結果、散発的に発生が確認されている。台風や低気圧の通過などで多飛来することがあるので、今後の発生動向に注意する。

2. だいず

(1) 紫斑病

開花期 25～35 日後に薬剤散布を行う。また、この時期は子実性害虫(マメシンクイガ、カメムシ類等)との同時防除を実施する。なお、薬剤散布を行う場合は、莢に薬剤が付着しないと十分な防除効果が得られないので、ていねいに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) マメシンクイガ	平年並

1) 予報の根拠

ア．前年の発生量は平年並であった。

2) 防除上注意すべき事項

ア．連作ほ場や前年発生が多かったほ場では、生息密度が高くなる傾向があるので、開花期 25 日後およびその 10 日後の 2 回、必ず薬剤散布を行う。

イ．薬剤散布を行う場合は、莢に薬剤が付着しないと十分な防除効果が得られないので、ていねいに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) ジャガ代 ヒゲガアブラムシ	平年並

1) 予報の根拠

ア．7月後半の巡回調査の結果、本種の寄生および加害による吸汁痕（黄色斑点）の発生はやや少ない。（-）

イ．8月の気温は、高い可能性が大きいと予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

ア．水田転作ほ場等でだいずの生育の旺盛なほ場では、急激に増加する恐れがあるため、定期的にはほ場を見回り、葉裏の寄生状況をよく観察する。本種の寄生虫数や吸汁痕の増加がみられる場合には、速やかに薬剤散布を行う。

イ．薬剤散布を行う場合は、薬剤が葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。

(4) ハスモンヨトウ

7月5 半旬までのフェロモントラップにおける誘殺数はやや少ない。今後も台風や低気圧の通過などで多飛来することがあるので、ほ場をよく見回り早期発見に努める。発生を確認し、薬剤を散布する場合は、3 齢以降の幼虫には効果が著しく低下するので、若齢幼虫時に実施する。

(5) ウコンノメイガ

7月中旬頃からだいずほ場での被害が確認されている。8月上旬頃から被害(葉巻)が目立ち始めるので、ほ場をよく観察し被害が多い場合には防除を行う。特に、生育の旺盛なほ場や葉色の濃いほ場で多発生する傾向があるので注意する。

園芸作物

1. りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 斑点落葉病	多 い

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量はやや多い。(+)

イ. 8月の天候は、気温が高く、降水量は多い可能性が大きいと予報されている。
(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 8月上・中旬、下旬は、必ず防除を行う。

イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

ウ. 不必要な徒長枝はせん除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 黒星病	多 い

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在、各地で発生が確認され、発生量は多い。(+)

イ. 8月の降水量は、多い可能性が大きいと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 園地内の見回りを徹底し、発病葉や発病果はみつけしだい摘み取り、適切に処分する。

イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

(3) 炭そ病

降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、例年発生のみられる園では薬剤の選定に留意する。また、発病果はみつけしだい摘み取り適切に処分する。

2. ぶどう

(1) 晩腐病

初確認日は7月21日で、平年より早い(平年初確認日: 8月2日)。発病した果房、果粒は、二次伝染防止のためみつけしだい摘み取り、適切に処分する。

(2) 灰色かび病

7月27日現在の発生量は平年並である。発病した果房、果粒は、二次伝染防止のためみつけしだい摘み取り、適切に処分する。

(3) ベと病

デラウェアでは収穫終了後直ちに薬剤散布を行う。大粒種では8月以降も発生が増加するおそれがあるので、8月上旬～中旬に防除を行う。

(4) 褐斑病・さび病

例年発生のみられる園では、収穫終了後直ちに防除を行う。なお、薬液が葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。

3. もも

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 灰星病	平年並

1) 予報の根拠

ア．7月27日現在の発生量はやや少ない。(-)

イ．8月の降水量は、多い可能性が大きいと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア．発病果はみつけしだい摘み取り、適切に処分する。

イ．降雨が続くと発生が多くなるので、適切に薬剤防除を行う。なお、品種ごとの収穫開始時期を考慮し、農薬使用基準を厳守する。

(2) モモハモグリガ

被害がみられる園では、薬剤防除を行う。なお、品種ごとの収穫開始時期を考慮し、農薬使用基準を厳守する。

4. 西洋なし

(1) 輪紋病

8月の降水量は、多い可能性が大きいと予報されている。降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

5. 日本なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 黒星病	やや多い

1) 予報の根拠

ア．7月27日現在の発生量はやや多い。(+)

イ．8月の天候は、気温が高く、降水量は多い可能性が大きいと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア．夏期の高温により病勢は一時的に抑制されるが、発病葉や発病果は伝染源となるので、みつけしだい摘み取り、適切に処分する。

イ．降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

6. 果樹共通害虫

病虫害名	対象作物名	予報内容
		発生量
(1) 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ・チャバネアカカメムシ)	りんご・もも ・なし・かき	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 7月の巡回調査では、被害果は確認されていない。
- イ. 7月5半旬までの予察灯におけるクサギカメムシ、チャバネアカカメムシの誘殺数は平年並である。
- ウ. 8月の気温は、高い可能性が大きいと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 今後、新成虫の発生により、突発的に園地内へ飛来するおそれもあるため、園内を十分に見回り、早期発見に努める。
- イ. 成虫の飛来が確認される場合には、直ちに薬剤散布を行う。

病虫害名	対象作物名	予報内容
		発生量
(2) ハダニ類	りんご・もも ・なし・おうとう	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 7月27日現在の発生量は、りんご、もも、なしではやや少なく、おうとうでは多い。
- イ. 8月の気温は、高い可能性が大きいと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 園地をよく観察し、成幼虫数が1葉当たり3頭以上みられたら、直ちに殺ダニ剤を散布する。なお、被覆資材の除去が遅れたおうとう園では特に注意する。
- イ. 園地の除草を徹底する。また、不必要な徒長枝は、散布薬液の到達を著しく不良にするのでせん除する。
- ウ. 薬液が樹冠上部にも十分付着するようていねいに散布する。

(3) シンクイムシ類 (モジクイガ・ナシクイ) (りんご・もも・なし)

8月以降もシンクイムシ類の加害は継続するため、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を徹底する。なお、被害果はみつけしだい摘み取り適切に処分する。

(4) ウメシロカイガラムシ (もも・おうとう)

樹冠上部までよく観察し、発生がみられる園では、ふ化幼虫 (橙黄色の幼虫) の発生初期に薬液が樹冠上部にも十分付着するようていねいに散布する。また、ももでは収穫期にあたり防除ができなかった場合は、収穫後直ちに防除を行う。

(5) リンゴコカクモンハマキ (りんご・なし)

被害がみられる園では、若齢幼虫時に防除を行う。なお、幼虫は樹冠部の新梢先端葉に寄生しやすいので、薬液が樹冠上部にも十分付着するようていねいに散布する。

7. 夏秋きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 褐斑病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 7月27日現在の発生量は平年並である。
- イ. 8月の天候は、気温が高く、降水量は多い可能性が大きいと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 発生を確認したら直ちに薬剤を散布する。また、発病葉は取り除き適切に処分する。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間をみて防除を行う。
- ウ. 通風をよくするため、過繁茂にならないよう適切な肥培管理を行う。

(2) ベと病・斑点細菌病

7月27日現在の発生量は、べと病が平年並、斑点細菌病がやや少ないが、降雨が続くと発生が拡大することがあるので、ほ場をよく見回り、発生初期の防除を徹底する。

(3) うどんこ病

7月27日現在の発生量はやや少ないが、乾燥が続くと発生が拡大することがあるので、ほ場をよく見回り、発生初期の防除を徹底する。

8. すいか

(1) 炭そ病

7月27日現在の発生量はやや少ないが、降雨が続くと発生が拡大することがあるので以下の対策を徹底する。

- ア. 発生がみられるほ場では、直ちに薬剤を散布し拡大を防止する。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間をみて防除を行う。また、排水対策を徹底する。
- ウ. 通風をよくするため、過繁茂にならないよう適切な管理を行う。

9. きく

(1) アザミウマ類

7月27日現在の発生量はやや少ないが、例年夏期に発生が多くなるので注意する。なお、ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそウイルス(TSWV)を媒介する主要な種であるため防除を徹底する。

今後のアザミウマ類の密度抑制を図るため、以下の対策を実施する。

- ア. 雑草での増殖および飛来を防止するため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。
- イ. 収穫が終了したら被害株は適切に処分する。
- ウ. 薬剤散布の際は、葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。
- エ. 薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループを輪用散布する。

10. 野菜・花き共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) アブラムシ類	夏秋きゅうり ・秋冬はくさい・きく	やや多い

1) 予報の根拠

- ア．7月27日現在の発生量は平年並である。
- イ．8月の気温は、高い可能性が大きいと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア．秋冬はくさいを育苗する場合は、寒冷しゃ等を利用して、有翅虫の飛来を防止する。
- イ．早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬液が葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) ハダニ類	夏秋きゅうり・きく	やや多い

1) 予報の根拠

- ア．7月27日現在の発生量は平年並である。
- イ．8月の気温は、高い可能性が大きいと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

- 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬液が葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。

東北地方 1か月予報

予報期間 7月24日から8月23日
平成22年7月23日 仙台管区气象台発表より

< 予想される向こう1か月の天候 >

天気は数日の周期で変わるでしょう。低気圧や気圧の谷の影響を受け、期間の中頃からはぐずつく時期もある見込みです。

向こう1か月の気温は、高い確率が60%です。

週別の気温は、1週目は高い確率が70%、2週目は平年並または高い確率がともに40%です。

< 確率 >

期間	要素	地域	低・少	平年並	高・多
1か月	気温	東北地方	10	30	60
1か月	降水量	東北日本海側	30	30	40
1か月	日照時間	東北地方	40	30	30
1週目	気温	東北地方	10	20	70
2週目	気温	東北地方	20	40	40
3～4週目	気温	東北地方	30	40	30

< 予報の対象期間 >

1か月 : 7月24日(土)～ 8月23日(月)
1週目 : 7月24日(土)～ 7月30日(金)
2週目 : 7月31日(土)～ 8月6日(金)
3～4週目 : 8月7日(土)～ 8月20日(金)